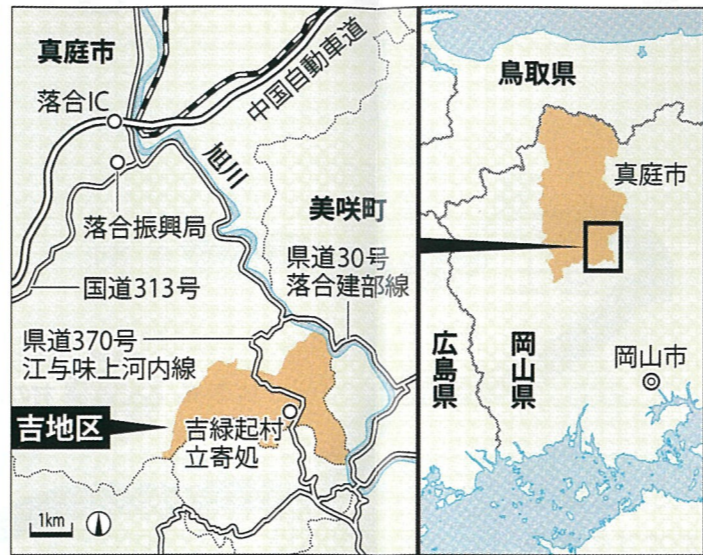




撮影OK立寄処



④相愛地区への方向を示す看板。カプルの記念撮影スポットだ⑤立寄処の売店のシャッターに描かれた相合い傘。営業時も頼めばシャッターを下ろしてもらえ



真庭市吉地区の住民が、大字吉から「大吉」を連想し、地域おこしの有志グループ「吉縁起村」を結成して3年。地区周辺にある「相愛」や「真賀」「寿老」など縁起の良い地名や神社仏閣などをPRするパンフレットや案内板を作り、住民や観光客の交流拠点も開設し、地域の活性化につなげる活動を続けている。【石川勝二】

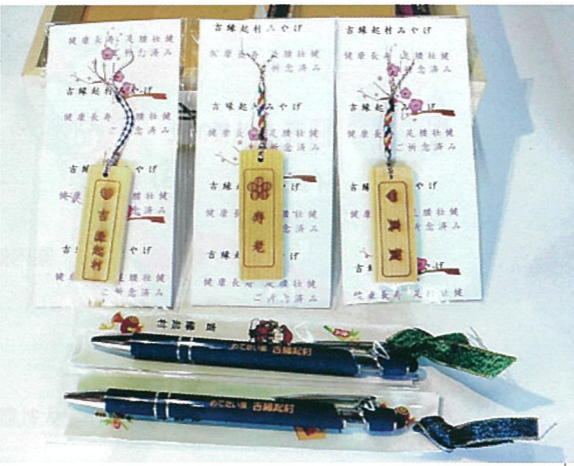
吉地区は真庭市東南端、美咲町との境に位置する約50戸100人余りの集落。真庭市街地と岡山市方面を結ぶ県道370号江与味上河内線が地区を縦貫し、県南北を行き来する通行車両は多いが通過するばかりだった。

吉縁起村は2018年12月に住民による実行委員15人で結成。代表の藤原元夫さん(68)は「県道拡張計画が進み交通量が増えるが、ますます取り残されると危機感があった。過疎化が進む限界集落をなんとかしなければ」と話し合っていた」と振り返る。相愛の案内看板を「愛と巡礼のスポット」として挙げられたのが、寺名に福がある「法福寺」。県重要無形民俗文化財の吉念仏踊りが250年続く。縁結びの神様をまつる出雲大社鶴山支

板の前で若いカップルが写真を撮っていたという話を聞き、「愛のパワー」スポットにできないか、「ほかにもめでたい地名やスポットをリストアップしよう」と話が進んだ。地名では吉の「相愛」「真賀」、隣接する同市田原山上地区の「鳩石」、美咲町江与味地区の「寿老」などが並んだ。

「新名所」再発見

“大吉”スポット みんな来て!



⑤商店を改修した吉縁起村立寄処は住民や観光客が集まる交流拠点⑥立寄処の売店では木札ストラップやボールペンなどのグッズも販売している

こうして再発見した地域の魅力を案内するパンフレットを作ったり、県道沿いに案内看板を設置したりPR態勢を整えていった。2020年3月には使われなくなった店の2階建て店舗を活用させてもらい、「立寄処」としてオープンさせた。立寄処の売店コーナーは毎月第2、4日曜日に営業し、地元農家の野菜や手作りのちいらし、まぜご飯、お菓子などを格安で販売。真庭産ヒノキを使ったストラップや

地域内外交流の場も

教会、向かいの亀山には吉八幡神社があり、「鶴と亀」が並ぶ。同神社境内と相愛地区の道路脇には斜め45度に傾いても枯れない木があり、ここに



くじけない樹



「撮影スポット」として池もリストアップした。池もリストアップした。池もリストアップした。

ボールペンなど吉縁起村グッズも置いている。吉縁起村事務局局長の鈴木昌徳さん(68)は「売店には車で通りかかったよその地域の人や、家に籠もりがちで地元の人々も暮らしてお年寄りも寄ってくれる。ここが地域の人たちの交流の場となっていきたい」と期待する。



吉縁起村の案内板の前に立つ藤原元夫代表(左)と鈴木昌徳事務局局長

楽しみながら取り組み

藤原さんたちは3年前の活動開始から、取り組みの様子を「吉縁起村新聞」としてインターネットに掲載したり、プリントを各戸配布して定期的に報告してきた。吉縁起村実行委員のメンバーだけでなく、住民たちが観光スポット周辺の清掃や、山道の整備などに協力してくれている。今年9月には立寄処のシャッターに美術大の学生たちがボランティアで七福神と相合い傘を描いてくれた。鈴木さんは「地域を活性化させようという縁起村の目的が、みんなに理解してもらえるようになった」と成果を感じている。また、今後の課題として鈴木さんは「ここに来れば味わえる特産品を開発し、各スポットに説明板を設置するなど観光地としてアピールできるように取り組んでいく必要がある」と指摘する。

にぎわいを呼ぶイベントを計画したいが、コロナ禍で実現できていない。藤原さんは「コロナが収まれば各スポットを巡るウォーキングや地元の食材を使ったクッキング、子どもたちも遊べるアスレチックなどもできたらいいと思う。縁起村の取り組みはみんなが楽しみながら続けていきたい」と意欲をみせる。